

初等教育における表現の多様性に関する一考察

－図画工作科・音楽科の横断的取り組み－

芦田 風馬

[抄 録]

本研究では図画工作科と音楽科の横断的な取り組みとして、音を聞くことから始めて音を線で表し、さらに粘土で音を形に表す取り組みを行った。小学校4年生2クラス（計63名）の図画工作科の授業で音楽のゲストティーチャーによって、音の要素（高さ、強さ、長さ）が意識できる活動を行い、その後作成した「波」をもとにした自然の音声を流し、その音声から感じた表現を粘土のよって行った。その結果音の要素と結びついた表現が45作品、音のイメージから情景を広げた表現が18作品を確認することができ、子どもの感想の記述も総合的に考察を行うことで、図画工作科の中に音楽科を取り入れた授業は表現を広げるための効果が認められた。

キーワード：図画工作科，音楽科，粘土造形，教科横断

はじめに

現行の小学校学習指導要領（平成29年告示）が令和2年から全面実施され、小学校では「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動展開する中で」、「児童に生きる力を育むこと」を注目した教育が行われている。その教育展開で「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実」と「創意工夫を生かした特色ある教育活動」が指導者に求められる。⁽¹⁾こうした中、初等教育において教科を横断した取り組みが増え、図画工作科と音楽科の授業についても芸術科目という領域に関連した授業内容が展開することが創意工夫をした教育活動につながると考えられる。もともと音楽科と図画工作科は芸術系教科としての共通点があり、表現や観賞といったキーワードが教科の中でも重要視されているといえるため、互いに教科を超えて学びを深めることが期待できる。

本研究では図画工作科の授業において、音楽科の要素を取り入れた実践を行うことで、子どもの造形表現がどのように表されていくのかを分析し、造形と音の関連による学びが子どもにどのような影響を与えているのかを考察することを目的としている。具体的な内容として、4年生の粘土を扱った題材の中で、聞き取った音をもとにしながら、立体造形として表現する内容として授業を進める。

Ⅱ．先行研究の動向

(1) 図画工作科と音楽科の横断的な取り組み

近年では教科書の題材としても、音を聞き絵に表す活動や、絵画から音を感じ取るなど図画工作科の中でも音楽的な要素が取り入れられた授業が扱われるようになってきている。しかしその歴史は古くから存在しており、井上によると昭和52年から合科的な指導が文言として明記されている。さらに図画工作科と音楽科の合科的な指導としては明治にさかのぼることが報告されている。⁽²⁾

図画工作科に音楽科の要素を取り入れた実践例としては、音（音楽）を聞いて絵画に表す活動や、音作りをするための楽器を作る活動などが挙げられる。本研究では前述の図画工作科に音楽科を関連付ける合科的指導として調査を進めるため、図画工作科の中に音楽の要素をどのように取り入れるかによって授業内容が大きく変化するといえる。有川の研究では、図画工作科の授業の中で音楽を取り入れた実践を行い、子どもの表現活動の効果、発達段階による差異について報告をしている。⁽³⁾指定したオノマトペから得られたイメージを抽象的な絵画表現を行い、2度目には音楽を付け加えることで同じオノマトペでもどのような違いが表れるか調査を行なった結果、年齢が低い子どもが表現に広がりが見られる傾向にあると報告している。音楽を聴くことによって表現が変化するということは図画工作科の中で音楽科が教科を超えて表現の幅を広げる役割を担っているといえる。

また森田の研究では音楽科を軸として国語科と図画工作科の合科的な指導について調査を行なっている。内容としては音楽科の授業の中で図画工作科を関連させ、聞こえた音を線や色で表すという取り組みである。⁽⁴⁾子どもの多様な表現が確認できる中には、曲のリズムや調子、強弱によって色や形が変化し、その音の要素の意味を表現に関連させていることが明らかにされている。

さらに井上は図画工作科と音楽科の合科的な指導の類型を示しており⁽⁵⁾両教科の関与のさせ方の可能性が明らかにされている。井上はこの合科的指導の中で造形活動のために音を使用するにとどまる実践を指摘しており、確かに音源をもとに造形活動を行う活動は音楽の要素は学びとして子どもが得られているかという点に関しては必ずしもそうであるとは言えない場合がある。

(2) 本研究の位置付け

上記3点の研究では実践の中で、造形表現のために音をきくという取り組みがされている。本研究でも音を聞くことから始め、音を線で描き、粘土で形に表すといった流れで授業実践を行う。また、前述の井上が示す類型の中では「領域横断型」として図画工作科の授業の中に音楽科を関連づける指導としてすすめる。

筆者は図画工作科が専門としている教員のため、音楽科の専門の教員(ゲストティーチャー)と共に行う。調査の方法として、音を聞き、描いた描線と粘土での制作物の比較検討を行うことと、子どもが記述する感想カードから、音を形にする取り組みについての全般的な考察を行うこととする。

(3) 音を描く、作ることにについて

初田の研究では音を聞くことで描画を行う取り組みを、小学生、大学生、教員といった幅広い年代に行なっている。その中で音からイメージした描画を以下5つのパターンにに分類を行なっている。⁽⁶⁾

- ① 身体的な反応として捉える
- ② 音から直接形を想起する
- ③ 言葉への置き換え
- ④ 音要素と造形要素との対応関係を用いる
- ⑤ パターンや記号の使用

こうした分類は授業実践での目的や内容を明確化しやすくなることに期待ができるが、本実践でのねらいとしては図画工作科の学習と共に音楽科としての学びも取り入れると考えているため、特に上記の累計の④音要素と造形要素との関係を用いるといった点は効果的に学習ができると推察する。

本実践で行う教科は図画工作科であるが、音楽科の要素を取り入れるためには単に音を聞かせるにとどまることは、子どもにとって音楽科の意識は少ないと考える。そのためゲストティーチャーと協議の上で音の要素として「高低」「長短」「強弱」を授業の前半に意識することで造形にも関連が現れると考え設定した。さらに音声として流すものには波の音を音源として再編集を行い、穏やかな波から激しい雷雨を伴った波がくりかえし流れるものを1分間として用意をした。波は現物、絵画や映像等で視覚的に確認ができ、具体的な形をもっていると言えるが、瞬間的な形態であり、定まった形があるわけではないので、子どもの表現としても自由な形にできると考えたため設定をした。

最終的に制作物として扱う素材は土粘土とするが、これは音を聞いてから形にする際に、立体物を取り扱っている実践報告があまりされていないためである。粘土での操作は360°様々な角度や高低、塊など立体における要素は空間的に広がりをもち、絵画表現と比べると

視覚的にその表現の動きが認識できると考えたためである。さらにその表現の動きの中には、音楽の要素として構成されるものとの共通点も見出すことができると考えたためである。

Ⅲ. 授業の取り組みの概要

図画工作科の授業において音楽科の教員を招いて（以下ゲストティーチャー）共同で授業実践を行った。概要は以下の手順である。

(1) 実践日時・指導方法

- ・授業実践校 京都教育大学附属京都小中学校初等部
- ・授業実践日時 2022年7月4日
- ・授業実践学年 4年い組 4年ろ組
- ・題材名 「音を形にしよう」

① 身の回りの音を聞く

1分程度の時間を設けて、学校の中もしくは図工室の中など生活する上での音がどのようなものが聞こえてくるのかを意識して聞き取り、記述を行う。

② ゲストティーチャーの発声を線で描く

ゲストティーチャーの発声を聞き取りその声（音）の高低、長短を線で図示する。具体的には「低くて長い」「高くて短い」「高い低いの繰り返し」「徐々に低くなる」「一気に高くなる」といった5つのパターンである。

③ 「波」の音を聞き、キーワードの記述及び線で描く

約1分にまとめた波の音のする音声をスピーカーで流し、中でも印象的だった場面を②を参考に高低、長短、強弱を意識しながら線で図示をする。波の音声は穏やかなさざなみから、岸壁に打ち付ける荒い暴風の荒波へと変化し、また穏やかに戻っていくといった一連の流れのある音声となっている。

④ 粘土を使って「波」の音を形作る。

土粘土を使用し、音声から感じた思いを形に表現をする。

(2) 実践の結果

4年生2クラス（全63名）の実践を通して明らかになった事例を前述の①から④の子どもの様子を以下にまとめる。

①の段階では静かに聞き取ることによって、普段意識することのあまりない心臓の鼓動であったり隣の人の呼吸音などが挙げられた。またその瞬間にしかない風の音や他の教室から

聞こえてくる歌声など、比較的大きな音量で聞きとることができるものも多く上がった。

②の段階としてはゲストティーチャーの発声の変化を捉え線で図示をする取り組みである。特に高低、長短については意識をして記述をすることができている。この段階ですでに描線を絵画的な意識をもって描かれているものも多数確認できた。(図1)




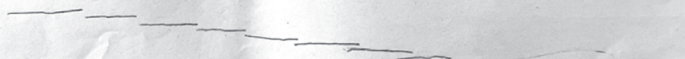
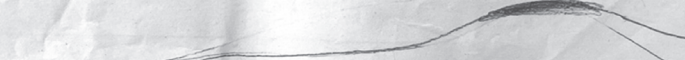
Ⅱ 人の声に耳をかたむけよう・声を出してみよう	
どんな声か書いてみよう	声を形や線で表してみよう
① ずと同じで低い。 まっすぐ、声がつながって いる。	
② 声が高く、小さい。 2つの声は、ほかの声よりせい	
③ 高い→低いのくりかえし 波けたいな感じ。 ぐねぐねしている。	
④ だんだんさがら、ていて。 少しずつかさくなる。	
⑤ 小さい声から大きい声で 少しずつ大きく。	

図1 音を線で表す

③の段階では波の音を聞き取る段階であるが波の音であることは伝えていない。したがって波の音であると認識している子ども他には車、や電車が走っているおとであると認識する子ども確認できた。ここでは自身の経験が非常に大きな関わりがあると考えられる。実際に海で過ごした穏やかな経験や、映像で見た打ち付ける波などが記憶として刻まれているといえる。そのため描線で表す段階では、音そのものの形を表現して記述している他に、具体的な恐竜や電車など、その場面に登場しそうなものが具体的に描かれていることがわかった。

④の段階ではこれまでに聞き取った音声をもとに粘土で表現をする段階である。使用した粘土は並信楽の土粘土であり、事前に土粘土の使用方法や丸める、ねじる、つなげるなどの操作は習得している。本実践では3の段階で記述した描線をもとにして、表現を行うが、2次元のスケッチを3次元に落とし込む作業は比較的難易度が高いことと、粘土の特徴として、細長く高さのあるものは自立しないことから、安定感のある作品が多く確認することができた。

Ⅳ. 実践結果からみる表現の多様性

(1) 表現の分類として

全63名分の粘土の形態は筆者の予想では波の音と聞き取る子どもが多くなり、波の形に似た表現が現れる他に、波からさらにイメージを広げ、実際に自身が海に行った時や映像などで見た状況を作り出す具体的な形態をもったものも現れると予想をしていた。比較的抽象の形態をもった表現が多く現れており、中には蛇のようないびつな表現や丸い球のようなものを並べて配置するなど、粘土の操作を活かした作品が確認できた。

こうした表現を子どもの記述した感想カードをもとに音の要素と照らし合わせたところ以下の通りに分類することができた。（表1）

表1 粘土作品の音と関連させた分類

【強弱が意識された表現】	23 作品
【高さが意識された表現】	15 作品
【繰り返しを意識された表現】	6 作品
【長さが意識された表現】	1 作品
【音から情景がイメージされた表現】	18 作品

【強弱が意識された表現】が23作品と一番多く表現されており、これは特に子どもの感想カードからの読み取りで強弱や大きいといったキーワードを元に出している。造形の要素としては小さいものと対比することで大きさを表すなどの工夫がされており、音声の中でも大きな音が出る場面が印象的だったために強弱の要素を造形に取り入れたことが想定できる。

【高さが意識された表現】では1作品と比較的多く、音の高低という要素を粘土の中でも高さの変化をつけた表現を行うことで、視覚的に表しやすいということが起因していると考えられる。平面と立体の大きな違いとしては高さがあるかどうかに関係しているため、高低の意識は立体の中で表現がしやすいという理由が挙げられる。

【繰り返しを意識された表現】は感想カードの記述として確認することができ、表現の形態と照らし合わせると、同じ形が繰り返し現れているものが確認でき6作品となった。授業内でゲストティーチャーの声を線に表す段階では繰り返すという要素については触れてはなかったが、音楽のなかでは繰り返すことは非常に大きな要素の1つといえる。音声は波の音が繰り返し流れていたため繰り返される1連の流れを意識したことに繋がったと考えられる。

【長さが意識された表現】は1作品にとどまり、長い短いといった音の要素は造形表現及び感想カードでは確認することが少ない結果となった。これは波という自然の音を流していた

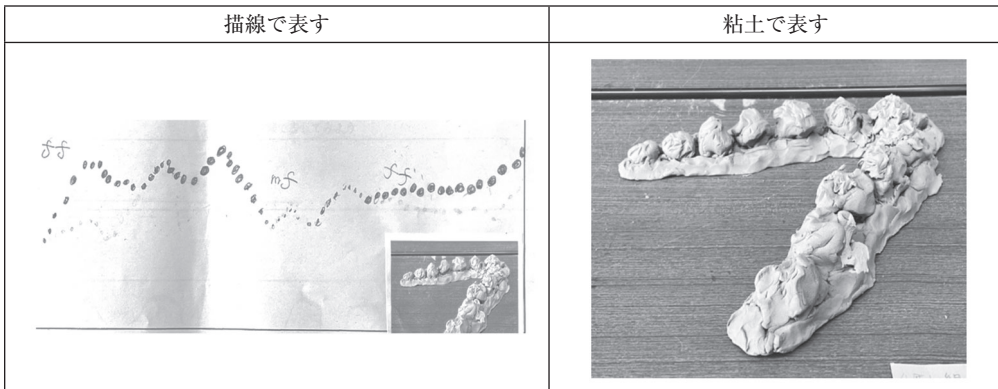
ため、音声の中で機械的に途切れたりするような場面は無く、繋がった一連の自然の音であったからと考えられる。

【音から情景がイメージされた表現】では具体的に鳥や岸壁、魚、波などが表されているものが多数確認できた。またその他この分類の中で多く取り上げられたものが車や電車が通る時のイメージとして記述及び粘土での表現を行う作品が6作品確認することができた。そもそも波の音とは伝えていないため、聞こえた音声から子どもは自由に発想することができるが、多くは自然の波の音であることを認識していた。

こうした分類分けを行うことができたため次項ではそれぞれの分類での子どもの表現がどのような形態であり、描画との関連性も含めて考察を行うこととする。

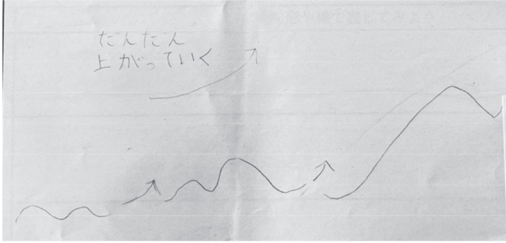
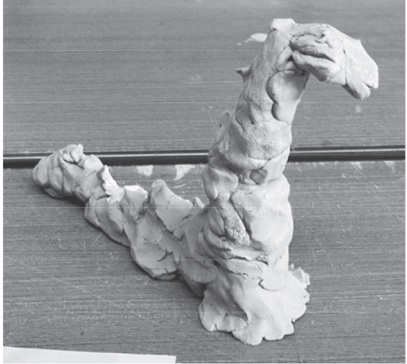
(2) 分類ごとの子どもの表現について

【強弱が意識された表現】A児



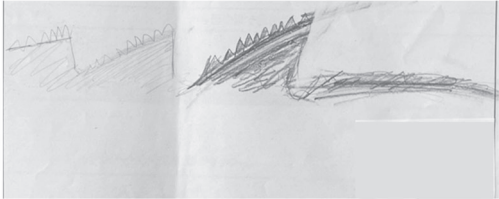
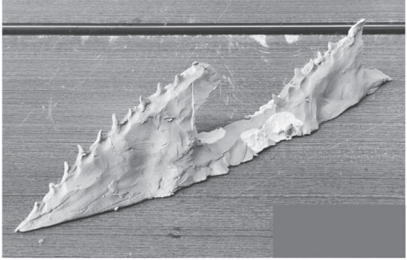
A児は描画の段階で「波」の音声から聞こえたイメージを勢いよく流れる川と考え、黒丸で水しぶきや水の中の泡などを表現しているように考えられる。強弱を黒丸の大小であらわしており、粘土のもつ塊の強さとが対応しているように感じられる。A児は (f) といった音楽記号も同時に記述していることから、音楽の知識ももともと持ち合わせている。こうした描画をもとに、粘土の表現では黒丸から得られた形態をそのまま踏襲しており、粘土としてもその大小や流れを表現できていると考えられる。こうしたことからA児は自身の音楽の知識をもとにしながら、音を形として捉え、粘土にも音の形と、水の勢いよく流れるという感じたことを混合させながら表現に至っていると考えられる。

【高さが意識された表現】 B 児

描線で表す	粘土で表す
	

B 児は描画の段階で徐々に上がっていくという記述とともに、描線が右上がりになっている表現をしていることが確認できる。粘土の形態としてもまさに高く伸ばしていくような表現となっており、全作品の中でも最も高さのある作品である。感想カードの中では下をトゲトゲにして、低い音や高い音を表し、その後一気に高くなったという記述をしている。音声の中では音の高低も聞き取ることができるが、強弱と高低の要素が子どもの中で混同している可能性も考えられる。しかし B 児は波の他に暴風が建物の隙間を吹く時に鳴るようなビューといった高い音を捉えていることを記述しており、自然界の音声の中でも、高低の要素を見出し表現することができている。

【繰り返しが意識された表現】 C 児

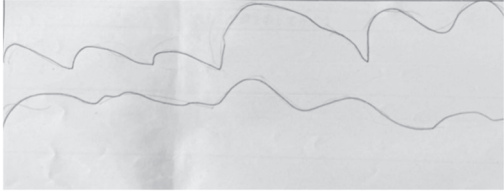
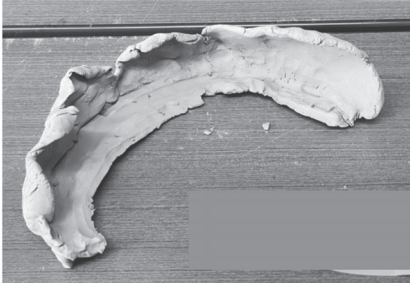
描線で表す	粘土で表す
	

C 児は描画では波の形に見える形態をしており、そこにトゲを取り入れることで激しい水しぶきの印象を受けとることができる。粘土の段階でも波のような三角形を繰り返し表現しており、これは「波」の音の中でも、繰り返し波が押し寄せては引くといった部分を再現していると考えられる。また、C 児は②の段階でも絵画的にゲストティーチャーの声を描画しており。その段階から直線やトゲを意識した描画がされていることから、本実践の中では自

身の意識した形態を常に表している。感想を記述したC児の考えでは以下が述べられている。「波の音が何回もあったから2つ同じ形を作ります。とがった音があり、荒れている音だったのでトゲも付けて徐々に小さくなるように表した。」



このことから音が繰り返していることが印象的であつことと、大きな形と小さな形が混じり合っているものを表現できていることがわかる。

【長さが意識された表現】 D 児

描線で表す	粘土で表す
	

D児は唯一長さの言及をしている作品となった。描画の段階ではうねりを帯びた描線が上下2本描かれており、横方向に長く伸びた描線となっている。しかしこの段階では多くの子どもが長い描線を描いているため、長さを意識した作品と分類することはできない。また粘土の段階としても迫り来るような波が表されている中で確かに曲線を含んだ長い作品と捉えることができる。感想カードで、伸ばすような音をどう形に表すかが難しかったが長い粘土を用意して作ったと記述している。この中からD児は音の長さについて粘土の伸ばすことのできる特徴と併せながら表現を行ったと考えられる

【音から情景がイメージされた表現】 E 児

描線で表す	粘土で表す
	

E児は「波」の音を聞いた段階では、嵐とともに海から怪獣が出てくるようなおどろおどろしさを感じていることがわかる。音の要素を抽象的な形態で表しているわけではないが、音から得られた印象を自身でイメージをひろげて具体的な情景を表現している波の中での恐ろしい印象を抜き出し、怪獣が出てくるというシーンは映像で見たものであったり、自身の経験が影響しているものと考えられる。

V. おわりに 可能性について

本研究では図画工作科の中に音楽科の要素を取り入れた実践を行い、粘土での表現の形態を調査してきたが、子どもの感想の記述をもとにすると、音の要素と造形の要素を対応させている作品は多く確認でき、両教科の学びが横断的にされたことは成果として挙げられる。また同時に音を聞くことで粘土での表現をする際に役に立ったかという質問に対してスムーズにイメージが広がったと回答をしている子どもが42人であった。このことから造形のイメージを広げる手立てとして音を聞くという取り組みは有効的であると考えられる。

そして立体作品として63点の多様な表現が現れたと考えられる。図画工作科では何を用いて、どんな手法で、何を作るのかが表現としての役割だといえる。その中でテーマ設定は非常に重要であり、何を作るかといった場面において何を作ってよいかかわからない子どもも見かける場面がある。これは教師による指導力に起因しているものとも捉えられるが、作り出すことの困難さも同時に感じる子どもは少なくない。こうした中、音を聞き形に表す活動では積極的にかつ迅速に取り組むことができていた。これは粘土の何度でもやり直しが効くという素材の特徴が関わっている可能性があることと、思考をしながらも直感的に音を表すことができていたことにつながっていると考える。

さらに音の要素と造形の要素を関連させながら表現を行ったことは、図画工作科と音楽科の教科を横断した形で学びが深まることにつながると言える。さらに学年が進むにつれて、造形の要素と音楽の要素が表現というキーワードで結びつくことを期待して実践を行うことを今後の目的としたい。

ただし問題点としては図画工作科と音楽科の両教科からの評価のアプローチが必要となると、両教科のめあてを明確に設定しておく必要がある。また本実践のように2名の教員が同時に授業を行った場合は評価についても協議が必要となってくる。図画工作科の教科として授業を行っている以上は、音楽科の学びが深まったことがわかっても、図画工作としての評価として取り入れるおこととなる。その評価の方法を具体的に両教科の棲み分けができることを今後の目標としている。

【注】

- (1) 文部科学省『小学校指導要領解説 総則編』, 2017
- (2) 井上朋子「図画工作科と音楽科における合科的な指導の類型化とその可能性」『美術教育』, 2010, pp.8~17
- (3) 有川貴子「感性でつなぐ芸術教科の合科的指導：図画工作科の抽象表現における、音楽による手立ての効果」『静岡大学教育実践総合センター紀要』, 2021, pp.437~446
- (4) 森田麻子「音楽科における合科的アプローチの導入－国語科および図画工作科との関連から－」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』, 第20号, pp.1~12
- (5) 井上 前掲
- (6) 初田隆, 井上朋子「音をかく活動の研究」『美術教育学』34号, 2013, pp.407~418

【付記】

本研究推進にあたって京都教育大学附属京都小中学校初等部の先生方, ゲストティーチャーとして参加下さった先生よりご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(あしだ ふうま 幼児教育学科)

2022年11月15日受理

